

肝臓がん治療に効果

製鉄記念室蘭病院 西胆振初MWA導入

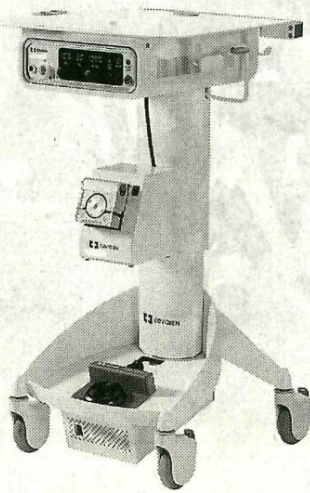
転移性、血管近い腫瘍にも期待

製鉄記念室蘭病院(前田征洋病院長)は、肝臓がん治療に「マイクロ波凝固治療(MWA)」を取り入れている。これまでの「可変型ラジオ波焼灼術(RFA)」と比べ、「短時間でより大きく球形に近い形でがんを焼灼することが可能」(同病院)。西胆振医療圏では同病院が唯一行う治療法で、血管に近い腫瘍や転移性肝がんの治療でも効果が期待されている。

(松岡秀宜)

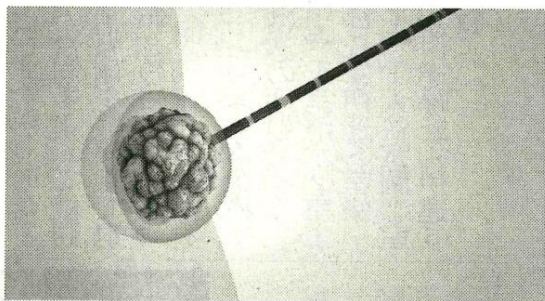


同病院は肝臓がんに対して、画像支援下でのカテーテルや針を用いた低侵襲治療・インターベン



ションラジオロジー(I VR)を積極的に実施。コンピュータ断層撮影装置(CT)や磁気共鳴画像装置(MRI)から画像を取り込んで、任意

肝臓がん治療のため、製鉄記念室蘭病院で用いられている「マイクロ波凝固治療(MWA)装置」はコヴィンディエンジャパン提供



の断面を表示可能にした超音波装置も導入する。など、診療機能の向上に勤めている。

2017年(平成29年)11月からは、手術よりも低侵襲な治療法として、肝臓のがんに向けて針を刺した上で、60〜100度ほどの熱で焼灼する治療法・MWAも始めた。MWAでは「ラグビーボールのような細長く焼ける傾向もあるRFAと比べ、短時間で大きく球形に近い焼灼が可能」(湯浅憲章放射線科長)という。

このため、がんの近くに血管がある場合でも、血液によって熱が冷却されることもなく、10分程度で最大4センチ程度の球状で焼灼が可能となったため、「径が大きい腫瘍や血管に近い腫瘍に効果が期待できる」(同)という。

さらにRFAでは、がんが残りやすかった転移性肝臓がんも、「残存なく焼灼が期待される」

(同)。このため、化学療法が効きにくかったり、副作用によって化学療法の継続が困難な患者にも、腫瘍の大きさ・数・場所などの条件によっては治療可能という。

同病院でも、すでに4人5症例の転移性肝臓がん患者の治療に用いているが、「いずれも良好な治療経過が得られている」(同)。18年度からは、大腸がんの肝転移症例では、肝臓を切除する手術との保険適応となったため、主な腫瘍は開腹手術で取り除いた上で、深い位置にあつたり、血管に近接するなど、切除困難な腫瘍についてはMWAを施すことも可能となった。

日本IVR学会専門医でもある湯浅科長は、「今後も地域住民の健康に貢献できるよう、最新の知識と治療技術の向上に努めたい」として、「他院へ通院中の患者さんも、適応できる可能性もある。気軽に相談を」と話している。